

エリシャの生活の終わり

2007. 5. 29 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

列王記・第二 13章14節から25節

エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んだ。エリシャが王に、「弓と矢を取りなさい。」と言ったので、彼は弓と矢をエリシャのところに持って行った。彼はイスラエルの王に、「弓に手をかけなさい。」と言ったので、彼は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上ののせて、「東側の窓をあけなさい。」と言ったので、彼がそれをあけると、エリシャはさらに言った。「矢を射なさい。」彼が矢を射ると、エリシャは言った。「主の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフェクでアラムを打ち、これを絶ち滅ぼす。」ついでエリシャは、「矢を取りなさい。」と言った。彼が取ると、エリシャはイスラエルの王に、「それで地面を打ちなさい。」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。神の人は彼に向かい怒って言った。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことだろう。しかし、今は三度だけアラムを打つことになるだろう。」こうして、エリシャは死んで葬られた。モアブの略奪隊は、年が改まるたびにこの国に侵入していた。人々が、ひとりの人を葬ろうとしていたちょうどその時、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去って行った。その人がエリシャの骨に触れるや、その人は生き返り、自分の足で立ち上がった。アラムの王ハザエルは、エホアハズの生きている間中、イスラエル人をしいたげたが、主は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のために、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼らを滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで彼らから御顔をそむけられなかった。アラムの王ハザエルは死に、その子ベン・ハダデが代わって王となった。エホアハズの子ヨアシュは、その父エホアハズの手からハザエルが戦い取った町々を、ハザエルの子ベン・ハダデの手から取り返した。すなわち、ヨアシュは三度彼を打ち破って、イスラエルの町々を取り返した。

ピリピ人への手紙 3章4節から14節

ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それら

をちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

今まで、何度もエリシャの生活について考えてまいりました。彼は、約二千五、六百年前に主なる神によって遣わされ、福音を宣べ伝えた預言者でした。彼の生活を通して、主なる神の力、つまり「よみがえりの力」を現わしてきたことを学んできました。毎日の出来事に「よみがえりの力」を経験したのは、このエリシャでした。

今日は、「エリシャの生活の終わり」について、一緒に考えてみたいと思います。

三つの出来事を一緒に考察してみましょう。

第一番目。「主の救いの矢」とは、主の完全な勝利を意味します。

この矢は、主の完全な解放の力と救いを象徴するものです。

第二番目。「矢で地面を射る」こと。

これは、私たちは主の定められた目標まで前進しなければならない、という厳しい警告を意味しています。

第三番目。「死んだ人がエリシャの骨に触れることによって生き返った」こと。

ここに、「よみがえりのいのち」と、「よみがえりの力」の秘訣が含まれています。

この三つの出来事は、エリシャの生活の素晴らしい締めくくりではないでしょうか。エリシャの肉体は次第に弱くなりましたが、彼の精神的な生活は満ちあふれたのです。エリシャの生活によって、「上からの力」が現われました。この「上からの力」は、死よりも強かったのです。

エリシャは、大変年老いた預言者であり肉体的には死にそうでした。しかしエリシャは、「失望」や「絶望」を知らなかったのです。

*第一番目。「主の救いの矢」

イスラエルの王ヨアシュは下って来て、エリシャの顔の上に涙を流しました。死にそんなエリシャは、自分で身を起こして、王に「弓と矢を取りなさい」と言いました。王がエリシャの弓と矢を持って来た時、エリシャはまたイスラエルの王に、「弓に手をかけなさい」

と言ったので、王は手をかけました。すると、死にそうなエリシャさえも自分の手を王の上に置き、そして二人とも一生懸命この弓を引きました。

この射た矢が、寝台の上から開かれた窓を通り抜けて行きました。その時エリシャは、「主の救いの矢」と叫んだのです。この矢のうちに「よみがえりの力」があったのです。この矢こそ、「主の完全な解放と救い」の象徴だったのです。

エリシャは、「シリアに対する救いの矢」と言いました。すなわち、「神の民」であるイスラエルに対する救いの矢でした。これは悪魔に対する勝利を意味しています。ここで、敵に対する勝利の秘訣がポイントとなるのです。

主のみこころは、あらゆる敵に対する完全な勝利を与えることです。主イエス様は、十字架によって悪魔に完全に打ち勝たれました。そして、私たち主を信じ受け入れた者は、イエス様の完全な勝利にあずからなければなりません。それは、「主のみこころ」です。

ここで、エリシャはイスラエルの民に完全な解放を預言しています。預言者が語るなら、それは主が語られることと同じです。預言者が行なうなら主が行なわれることと同じです。

この預言された勝利の象徴は、「射た矢」でした。けれど、イスラエルの民の代表者である王の不信仰によって、この預言された勝利はすぐには成就されなかったのです。こんにちでさえも、イスラエルの民はまだ完全に解放されていません。しかし将来、このイスラエルに対する預言は必ず成就されます。

私たち主に属する者にとって、この「救いの矢」はいったい何を意味しているのでしょうか。私たちも完全な勝利を経験すべきです。

- ・過去におけるイエス様は、私たちを罪の債務から救ってくださったのです。
- ・現在における主イエス様は、私たちを罪の力から解放したいと望んでおられます。
- ・未来における主イエス様は、私たちを罪の支配から救ってくださるのです。

私たちは、赦された罪に対する平安を持っていますし、また、打ち勝った罪からの勝利を経験します。将来における私たちは、イエス様によって成就された完全な贖いのみわざに対しての栄光の日を待ちます。私たちはその時、罪を犯す可能性がなくなります。

パウロは、コリント第一の手紙15章に一文章だけですが、
コリント人への手紙・第一 15章26節

最後の敵である死も滅ぼされます。

と記しています。「最後の敵である死も滅ぼされます」と。

よみがえりの主イエス様は、私たちにもうすでによみがえりのいのちを与えてくださいました。ですから、「最後の敵である死」とは、主のからだなる教会のうちに、また、からだなる教会によって、滅ぼされます。

しかし、どうして信じる者の群れである教会のうちに、また、教会によって滅ぼされるのでしょうか。それは、イエス様がもう既に死に対する勝利を得られたからです。そして

この勝利を得た主イエス様は、こんにちご自分に属している人々のうちに住んでおいでになるからです。勝利を得られた「かしらなる主イエス様」は、こんにちご自分のからだによって、すなわち教会によって、「最後の敵を滅ぼされる」ということが、聖書にはっきりと記されています。

エペソ書を読んでみましょう。よく知られているパウロの祈りです。

エペソ人への手紙 1章17節から23節

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

19節、20節を読むと分かります。この「よみがえりの力」は、あらゆる敵の力にまさる権威を意味しています。「よみがえりの力」は、勝利への道です。イエス様は、すべての支配、権威、権力、権勢の「主」なのです。

そして、主なる神は、イエス様を万物の上に「かしら」として、(単なる救い主、助け手としてではなく、)「かしら」として教会に与えられたのです。「教会はキリストのからだである」と22節、23節に書いてあります。

ですから、イエス様のからだである教会も、全体のよみがえりの力を経験するはずです。私たち信じる者は、あらゆる支配、権威、権力、権勢に対する勝利を得ることになります。

同じくエペソ書3章20節、21節をお読みいたします。

エペソ人への手紙 3章20節、21節

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

とあります。

十字架の完全な勝利を表わす器は、「イエス様のからだなる教会」です。なぜなら、イエス様のからだである教会のうちに、「よみがえりのいのち」があるからです。

ですから、私たちは今日、「よみがえりのいのち」によって生きることを、実際生活の「苦しみ」と「困難」のなかで学ばなければならないのです。これこそ、多くの理解できないことがらの説明や解決となるのではないのでしょうか。

つまり、私たちは困難のなかに、「イエス様のよみがえりのいのち」を経験しなければならぬのです。ある人は次のように思うかもしれません。「なぜ、私は良い働き場がないのか」。「なぜ、もっと良い両親がいないのか」。「どうして、私の家がこんなに暗いのか」。「なぜ、私だけに悩みが降りかかってくるのだろうか」と。イエス様は、是非あなたと親しい交わりを持ちたいと思っておられるからなのです。あなたがイエス様のよみがえりの力を自分のものとするために、あなたをそのような困難にお導きになったのです。

あなたはその導きを理解していないかもしれません。けれど、イエス様はあなたをいろいろな苦しみ、困難、またそのような理解しがたいことを通して、あなたにご自分を現わされたいのです。イエス様はあなたが、「よみがえりのいのち」によって前進することができるようにしてくださるでしょう。

高く引き上げられた「かしらであるイエス様」は、「からだなる教会」をお選びになりました。それは「イエス様のからだなる教会」によって、最後の敵である「死」を完全に滅ぼすためです。

イスラエルの王と預言者エリシャは、いっしょに矢を射ました。この矢はイスラエルのあらゆる敵に対する完全な勝利を意味していました。この矢は、「預言の矢」でした。

イスラエルの民は、千年王国で素晴らしい自由と大いなる栄光をもつようになります。この世において将来まで備えられている国は、イスラエルしかありません。イエス様は、全人類の罪のために十字架の上で死なれ、三日目によみがえられ、そして昇天され、現在父なる神の右に座しておられます。そして、このイエス様こそ私たちのうちに今も生きておられるのです

「よみがえりのいのち」とは何でしょうか。私たちの心の中におられる、「よみがえられたイエス様」です。もし、このイエス様が私たちの生活の支配者となられるなら、私たちは「主のよみがえりの偉大なる力」を経験します。

コロサイにいる兄弟姉妹に、パウロは次のように書いたのです。
コロサイ人への手紙 1章27節

神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあつてどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

信じる者のうちにおられるキリストは、「偉大なる力」を意味しています。「私たちのうちにおられるイエス様」こそ、毎日の生活における勝利の秘訣です。

エリヤとエリシャの関係は、主イエス様とまことの教会の間を表わしています。エリヤは昇天し、エリシャは二つの分の霊を受けました。主イエス様は昇天なさり、弟子たちは満ちあふれる聖霊を受けました。「エリシャ」は、新約時代のキリストに属する人々を旧約聖書の中で表わしているのです。

エリシャは「よみがえりの力」で働きました。新約時代の主イエス様に属する兄弟姉妹も同様に、「よみがえりの力」で生きるべきです。

列王記・第二 13章14節

エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んだ。

とあります。これは大変興味深いところです。なぜなら、同じことばをエリヤも叫んだのですから。

列王記・第二 2章12節

エリシャはこれを見て、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んでいたが、彼はもう見えなかった。そこで、彼は自分の着物をつかみ、それを二つに引き裂いた。

どうしてエリヤとエリシャが同じことばで叫んだのでしょうか。二人の預言者たちは同じことを経験したからです。すなわち、エリヤは携挙を経験し、死をみないでそのまま天に引き上げられたのですが、エリシャは普通の死に方をしました。しかし、精神的にエリシャも携挙の経験をもっていました。エリシャも「上からの力」によって、「よみがえりの力」によって死に打ち勝ちました。例えば、やもめの息子を生き返らせました。また、預言者のともがらの学校で、ある日、野菜を料理しました。しかし毒物だったのです。釜の中には、食べると死に至るものがありました。エリシャによって毒物は全部なくなりました。また、死にそうならい病のナアマンも癒されました。

つまり、エリシャは毎日の出来事に「よみがえりの力」を表わしてきました。この「よみがえりの力」は、死よりも強かったのです。死より強い力は、よみがえりを意味しています。ですから、エリシャも精神的にはエリヤと同じ経験をもっていたのです。

パウロの生活を見ても、同じことが言えるのではないのでしょうか。パウロが最初に書いた手紙は、テサロニケ人への手紙でした。この手紙に、

テサロニケ人への手紙・第二 4章15節

私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

と。パウロは、自分がイエス様の再臨を経験するということを期待していたのです。

けれど、パウロは、自分の生活の最期に、テモテに次のことばを書いたのです。テモテ第二の手紙は、彼が最後に書いた手紙です。つまり、彼は将来のことも分かりましたし、信じたのです。

テモテへの手紙・第二 4章6節から8節

私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私

に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

この箇所を読むと分かります。すなわち、パウロは主の再臨を経験することができない自分の死に方もよく知っていました。その後すぐに、彼はネロという皇帝によって殺されてしまったのです。殉教の死を遂げるようになりました。けれども、パウロはエリシャと同じように「よみがえりの力」を経験し、精神的には携挙を体験したのです。

パウロの死は、敗北ではなく、「死に対する勝利」でした。パウロの死は栄光に満ちたものでした。イエス様の名のためにパウロの首は切られたと言われています。けれども、パウロは完全な信頼と完全な勝利をもっていました。パウロは、よみがえりの力を経験しました。毎日の出来事の中に、よみがえりの力を現わしてきました。

この秘密は何だったのでしょうか。パウロは大喜びで、次のように言うことができたのです。(信じる者にとって最も大切な箇所の一つでしょう。)

ガラテヤ人への手紙 2章20節

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

「イエス様は、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった」と、パウロは主の恵みをほめたたえながら証したのです。もしイエス様が信じる者のうちに生きておられるなら、これは「よみがえりの力」を意味しています。

*第二番目。「矢で地面を射る」こと。

これは、私たちは主の定められた目標まで前進しなければならない、という厳しい警告を意味しています。前に読みました、第二列王記の13章18節をもう一度読みます。

列王記・第二 13章18節、19節

ついでエリシャは、「矢を取りなさい。」と言った。彼が取ると、エリシャはイスラエルの王に、「それで地面を打ちなさい。」と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。神の人は彼に向かい怒って言った。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことだろう。しかし、今は三度だけアラムを打つことになる。」

寝台の上から、開けた窓を通った一つの矢は十分ではなかったのです。預言者エリシャは怒りました。死にそんな預言者は、王より力強かったのです。エリシャは王に、「あなたはどのようにやめたのか。どうして終わりまで行なわないのか。どうして主の完全なみこころにかなった生活をしないのか。どうして最後まで前進しないのか。」

そしてこの結果は、「あなたはシリアを打ち破り、それを滅ぼし尽くすことができたであろう。しかしあなたはそうしなかったので、シリアを打ち破ることはただ三度だけである」と。不信仰のゆえに、「シリアを打ち破ることはただ三度だけであろう」。これは厳しい警告を意味しています。私たちも、主の定められた目標まで前進するかどうか重要です。

ヨシュア記の13章1節。短い文章なのですが、次のように書かれています。

ヨシュア記 13章1節後半

「あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。」

結局、「今から」です。

また、一文章だけですが、

歴代誌・第二 25章9節後半

「主はそれよりも多くのものをあなたに与えることができになります。」

主はおできになる。(私たちが不信仰によって妨げる者にならなければ。)

もう一箇所。詩篇の81篇10節です。

詩篇 81篇10節後半

あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。

これは主の呼びかけであり、主の切なる願いです。「あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう」と。

イエス様に属する兄弟姉妹はみな、自分の罪を悔い改め、イエス様を信じることによって、どんな信者でも永遠のいのちを得ています。けれど、回心、すなわち新しく生まれることは終わりではなく、初めです。「初め」だけです。

もし回心が終わりであるならば、あのパウロの力を入れた書簡は私たちに必要ではありませんし、使徒たちの厳しい警告にも耳を傾ける必要はありません。またもしそうなら、パウロは祈りの中で戦わなくてもよかったはずです。(実際にはそうではありません。)

ですから、パウロの心の奥底、パウロの目指す目的について書かれています。

ピリピ人への手紙 3章10節、11節

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

パウロの目的というのは、「死者の中からの復活に達したい」というものでした。「死人のうちからの復活」と、「死人の復活」とは同じではないのです。

ギリシャ語では「死人の復活」とは、ただアナスタシスとなります。けれども、「死人のうちからの復活」とは、エクスアナスタシスとなっているのです。これは全く別のものです。

回心を経験した者は、必ず死人のよみがえりを経験します。この死人の復活のうちに、信者たちみんなが含まれています。永遠のいのちを持っている者は、必ず死者の復活を経験します。イエス様ご自身がこのことを言われました。ヨハネ伝6章40節です。

ヨハネの福音書 6章40節

「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」

「子」とは、イエス様です。

そして有名なテサロニケ第一の手紙の4章16節、17節。いわゆる空中再臨について、次のように書かれています。

テサロニケ人への手紙・第一 4章16節、17節

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一っしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

この「キリストにある死者」と「私たち」は、みな熱心な兄弟姉妹ばかりであるというようなことは書いてないのです。「救いの土台はイエス様ご自身」です。ですから、主の救いにあずかった者は、みな死人の復活を経験します。

イエス様を自分の救い主として受け入れることは、本当に素晴らしいことです。けれどこれは土台だけです。この土台の上に立てる金、銀、宝石、木、草、わらの間には、大変な違いがあります。金、銀、宝石は燃えません。しかし、木、草、わらはたちどころに燃えてしまいます。パウロはこのことについて次のように書いたのです。

コリント人への手紙・第一 3章14節、15節

もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

原語を見ると、「救われます」となっているのです。

パウロの目的は、「死者のうちからの復活」でした。「キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死の様と等しくなり、何とかして死人のうちからの復活に達したいのです」とパウロは書いたのです。この目的に達するために、パウロは全生涯を主にささげたのです。

永遠のいのちは、贈り物としていただくものです。人間の努力は必要ではありません。

同じように「死人の復活」も、贈り物です。永遠のいのちを得た人は必ず「死人の復活」を経験します。しかし、「死者のうちからの復活」は報いなのであり、全生涯を主にささげた兄弟姉妹だけがいただくものです。

もし、聖霊が私たちの毎日の生活の中で考え、感じ、志すことを支配なさるなら、幸いです。そうやって初めて、私たちはイエス様とともに御座にあずかり、支配者となることができるのです。そうやって初めて、私たちは報いとして冠を得、「死人のうちからの復活」を経験することができます。

この「死人のうちからの復活」を経験することができるように、この目的に達するためにパウロは追い求めたのです。もう一度、ピリピ書3章に戻りましょう。

ピリピ人への手紙 3章11節から14節

どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

これはパウロの目的でした。

私たちの目的、私たちの態度はどうでしょうか。私たちは、イスラエルの王と同じように途中でやめるのでしょうか。預言者エリシャは怒りました。「あなたはどのようにやめたのですか。どうして終わりまで行なわないのですか。どうして主のみこころにかなった生活をしないのですか。どうして最後まで前進しないのですか」。

私たちは永遠のために働くのでしょうか。悪魔の仕事は、私たちの目をくらませることです。けれど、私たちは永遠のために生きましょう。

毎日、一生懸命働くのは当たり前です。主に従う者は怠け者ではありません。けれど、どういう動機で、どういう目的をもって働くかが問題です。

コロサイ書3章23節を読むと、パウロは当時の主の恵みによって救われた人たちに、次のように書いたのです。

コロサイ人への手紙 3章23節

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。

「主に対して、心からしなさい」と。

似ている箇所ですが、

コリント人への手紙・第一 10章31節

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。

そうすれば、初めて私たちの仕事は永遠に残るのです。

私は何年か前に、ある若者のグループを見ました。多分高校生だったでしょう。この学生たちは、神社の階段を上ったり下りたりしていたのです。少なくとも二十分程でした。この結果、過度の疲労だけが残ったのではないのでしょうか。多分、競技のためのトレーニングかもしれません。オリンピック競技のために、人間は何年間も必死になって一生懸命訓練します。そして幸運に恵まれれば、優勝してメダルをもらえるという場合もあります。

ヘルシンキオリンピックの乗馬競技で、ある女性がメダルを獲得しました。その女性は以前中風でした。しかし、力を尽くして一生懸命何年間か練習しました。オリンピック競技に出場したときには彼女は自分で馬に乗ることも、馬から降りることもできなかったのですが、競技そのものでは見事に優勝しました。パウロはそういうことを思い描いたのではないのでしょうか。

コリント人への手紙・第一 9章25節

また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

主は、私たちに、「取るべき地はなお多く残っている」と言っておいでになります。

パウロも、同じようなことを言っています。「何とかして死者のうちからの復活に達したいのです。私がすでにそれを得たというのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのです」と。

私たちは、昔のイスラエルの王と同じようにやめようと思うのでしょうか。それとも、イエス様はもっともっと与えてくださるということを確認しているのでしょうか。

主の永遠に定められた目標が重要です。主の御目的は、散歩ではなく、戦いまたは競技です。競技をする者はリュックサックを背負っていませんし、重い靴も履いていません。死者のうちからの復活に達したい者は、妨げになるものを全部捨てなければなりません。

コリント第一の手紙15章41節、42節をお読みいたします。

コリント人への手紙・第一 15章41節、42節

太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、

とあります。イエス様によって受け入れられた人たちはみな、死者の復活を経験します。そして、イエス様がはっきり、「わたしはその人たちを終わりの日によみがえらせます」と約束されたのです。けれど、「日と月と星との間に差があるのと同じように、死者の復活もまた同様である」と、ここで記されています。

私たちは、太陽の栄光が欲しいのでしょうか。イエス様の栄光が欲しいのでしょうか。

それとも主の定められた御目的に達したいのでしょうか。

パウロは、「何とかして死者のうちからの復活に達したい」と言い、また、「私はキリストとともに十字架につけられました。生きているのはもはや私ではなく、キリストが私のうちに生きておられます」と。

イスラエルの人々は、みな主の民に属していました。新約聖書で言えば、みな救いにあずかった者だったのですが、彼らは不信仰によって荒野で死んでしまったのです。救われた多くの兄弟姉妹は、火の中をくぐって来た者のように救われるでしょう。つまり、残る実は少しもないということでしょう。なぜなら彼らは永遠のために働かなかったからです。『主はそれよりも多くのものをあなたに与えることがおできになります。(第二歴代誌 2 5 章 9 節)』とあります。

エリシャは、イスラエルの王に対して怒りました。なぜなら、王は目的を達する前にやめたからです。もし、私たちが主の永遠からの定められた目的にまで前進しないならば、決して主に喜んでいただくことはできません。主の定められた目的にまで前進しないことは、「罪」です。

初代教会の群れの心からの願いとは、どういうものだったのでしょうか。コリント第二の手紙 5 章 9 節に書かれています。

コリント人への手紙・第二 5 章 9 節

そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

「私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです」と。

コロサイ書の中に、似ている箇所があります。

コロサイ人への手紙 1 章 10 節

また、主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。

* 第三番目。「死んだ人はエリシャの骨に触れることによって生き返った」こと。

先に読んでいただきました箇所を見て分かります。ここに「よみがえりの力」、「よみがえりのいのちの秘訣」が含まれています。もう一度読みましょう。

列王記・第二 13 章 20 節、21 節

こうして、エリシャは死んで葬られた。モアブの略奪隊は、年が改まるたびにこの国に侵入していた。人々が、ひとりの人を葬ろうとしていたちょうどその時、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去って行った。その人がエリシャの骨に触れるや、その人は生き返り、自分の足で立ち上がった。

とあります。

「こうして、エリシャは死んで葬られた」。つまり、葬儀はもう終わってしまったのです。エリシャの骨に触れることによって生き返った人の経験は、私たちも経験しなければなりません。この人は死んでしまいましたが、生き返ったのです。放蕩息子に対しても同じことが言われています。『おまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。(ルカ伝 15章32節)』と。

人間を二つに分けて考えることが出来ます。つまり、人間はたましいとからだが生きていますから、生きてるように見えます。けれど、主なる神が人間をご覧になった場合、人間はただ二つの種類、すなわち、生きている者と死んでいる者の二つに分けています。私たちもこの二つの種類のうちのどちらかに属しているわけです。

主からご覧になれば、私たちは生きているか、死んでいるかのどちらかです。私たちは道を歩いている人を見て、「この人は確かに生きている」と言います。私たちはそれを見て、その人のからだが生きていることを考えるのです。その人は肉体的ないのちを持っていますが、その人の精神は死んでいるかもしれません。もし死んでいるなら、(つまり、まだ生まれ変わっていないならば、) 主の目からご覧になるとその人は死んでいるのです。

次に、ある事務所で熱心に働いている商人を見てみましょう。私たちは、「この人こそは確かに生きている」と言います。けれど、私たちはただその人のたましいのいのちが働いていることだけを考えています。すなわち、その商人は考えること、感じること、欲することができます。けれど、主なる神の御判断は全く違います。主は、その商人は死んでいると言われるでしょう。私たちは、限りあるいのちについて話します。しかし主は、「永遠のいのち」について話されます。

また、私たちはイエス様を信じていて死んだ人の葬式に参加します。その兄弟姉妹の屍を見ます。その時私たちは、「この人は死んでいる」と言うかもしれません。つまり、私たちはその人の肉体の死を考えているのです。その人は考えることもできないし、動くこともできません。けれど主なる神は、「この人は生きている」と言われます。主の言われることが当然です。召された信じる者の精神は生きています。それは永遠のいのちをいただき、生まれ変わっているのだからです。

ですから、たとえ肉体は死んだとしても、実際には生きているのです。なぜなら、その人は罪や死によって侵されることのないいのちを持っているからです。そのいのちこそ、「主イエス様にあるいのち」なのです。

では、霊的な死とは何でしょうか。「霊的な死」とは、生まれながらのいのちを持ち続けていることです。主なる神の救いの道とは、「主イエス様と一っしょになる」ことです。イエス様との交わりがあることです。

ですから、イエス様に言いましょ。「イエス様。あなたは『いのち』そのものですか。そうでしたら、私に、その『永遠のいのち』を与えてください」と。するとイエス様は、「わたしのところにすぐ来なさい。たとえあなたの罪が緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのです」と言われます。

罪から解放されて自由になりたいと思いますか。もしそう望むならあなたは、主イエス様によって素晴らしい自由を得ることができる、と約束しておられます。イエス様は、私たちが罪から完全に救い、ご自分のみこころを完全に成し遂げる力を持っておいでになるお方です。

「よみがえりの力に至る道」とはどこにあるのでしょうか。どのようにして、私たちは、主のよみがえりの力を経験することができるのでしょうか。

「イエス様の『死』の様と等しくなることによって」とパウロは証ししています。イエス様の死の様と等しくなることは、よみがえりの力の秘密です。

死んだ人はエリシャの骨に触れることによって生き返りました。この人はエリシャの死の様と等しくなることによって、生き返ったのです。よみがえりの力を経験したのです。その人は、ピリピ書3章10節を経験しました。すなわち、「キリストとその復活の力を知り、その苦難にあずかって、その死の様と等しくなる」ということを経験したのです。「イエス様の死の様と等しくなる」ことは、よみがえりの力の秘訣です。これこそ私たちが、銘記しておくべきことではないでしょうか。

「イエス様の死」は、普通の死ではなかったのです。ヘブル書2章によると、イエス様は死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼした、とあります。

ヘブル人への手紙 2章14節後半

これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、…

イエス様は、ご自分の犠牲の死によって死を滅ぼし、そして死の力を持つ者、すなわち悪魔を滅ぼされたのです。私たち信じる者は罪を取り除かれたばかりでなく、「私たち自身」も取り除かれたのです。私たちは主とともに十字架につけられたのです。

パウロの告白は本当に大切です。

ガラテヤ人への手紙 2章20節前半

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」

これは信じる者にとって、聖書の中で最も大切なことばではないでしょうか。

御霊の呼びかけとは、次のようなものでしょう。

「十字架を見よ。

主イエスは汝の罪のみならず、汝の古き人とともに十字架につけられたことを知れ。

且つ、汝の古き人、キリストとともに墓に葬られたことを知れ。

見よ。主イエスが御墓からよみがえられたことを知れ。

汝は『主イエスの勝利』と『よみがえりのいのち』を汝のうちに受けようとしぬのか。」

この御霊、聖霊の声に対する私たちの答えは、どのようなものでしょうか。

私たちは、「はい。よみがえりの力が私の心のうちを支配していただきたいです」と、願っているのでしょうか。もしそうであれば、「よみがえりのいのち」の支配、力、自由が与えられるのです。

パウロは、力、知恵、名誉、権威、威厳などを持っていましたが、彼は決心しました。
ピリピ人への手紙 3章7節、8節

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、

10節、11節

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

黙示録の中に、

ヨハネの黙示録 3章21節

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

とあります。素晴らしい約束です。

主イエス様は人間ひとりひとりをういようと望んでおいでになります。ですから、内住の主イエス様を、パウロのように大切にすることではないでしょうか。

生まれながらの自分のものは主の働きの妨げとなります。自分の最大の敵は、もちろん自分の「自我」です。

みことばは語っています。「権力によらず、能力によらず、ほかの方法や道にもよらず、人間の計画にもよらず、わたしの霊によって」と。

私たちが主に従えば、主は豊かに祝福して、導いてくださるのです。

了